多文化を生きる子ども

法学部政治学科　4 年 Q 組
31259295　永田さくや

1．はじめに

2．先行研究
2-1　サードカルチャーキッズとは
2-2　カルチャーショックについて
2-3　アイデンティティについて

3．日本の帰国子女
3-1　逆カルチャーショック
3-2　学習面での困難
3-3　環境

4．　5 人の帰国子女
4-1　インタビュー
4-2　考察

5．おわりに

6．謝辞

多文化を生きる子ども

１．はじめに

「帰国子女って変わっているよね。」私の中学校と高校は、帰国子女入試がある学校であったので、全校生徒の 4 分の 1 程度は海外生活経験者だった。そんな中、日本でずっと暮らしていた友達から、このように言われることが何度もあり、私たち帰国生自身も、自分たちが「変わっている」ということをなんとなくではあるが気づいていた。大学に入っても、初対面の人から「帰国生っぽい」と言われることがあり、やはり自分は周りの人達と比べ、「変わっている」ということを自覚した。しかし具体的に何が「変わっている」か、ということは分からなかった。また、その異質性は海外在住経験によるものなのか、という

疑問も残った。

その人次第ではあるが、全く慣習、言語、歴史、生活様式などのプロトコールのなじみのない国の文化に適応することは簡単なことではない。異なる文化との出会いとそれへの適応は、外国に渡航するすべての人が経験することである。しかし本論文では、観光目的や留学目的で新しい文化に出会う者は研究対象としない。なぜならば彼らは自分の意思で渡航を決めたのであり、異なる文化とのぶつかりあいというものは彼らにとって予想可能なことだからだ。今回の調査対象としているのは、子ども時代に自分の意思や希望と関係なく母国を離れ、新しい文化への移動を経験した人達だ。なお、なるべく多くの人からお話を伺いたいため、ここでの「子ども時代」とは、0 歳から 18 歳とする。また、本論文では一定の期間外国で過ごした後に母国に帰ることになった人を研究対象としている。
日本を母国とする海外在住経験者は、帰国した後、「帰国子女」というレッテルをすぐに貼られる。外国語、特に英語が得意で、目立ちたがり。国語の能力は同年代の生徒より劣る。このようにその人の性格や行動をすべて「帰国子女」だから、と決めつけられてしまうことがある。しかしそれと同時に、日本人だからこれはできて当たり前、これは知っていて当たり前等、「日本人」であることも社会に求められるのだ。周囲から本人のキャパシティー以上の能力を求められてしまうと、期待に応えられないということから自信の喪失、自分はどの文化に属しているのか分からなくなるというアイデンティティの揺らぎなど、精神的苦痛を味わう。

私はこの論文で、子どもの頃に母国ではない国で生活することがその人の人格形成に関わっているのか、関わっているとしたら具体的にどのような影響を及ぼすのかを調査したい。また、私が特に注目したいのは、その人がどのようにホスト社会に適応していったのかということと、母国に戻る際、「逆カルチャーショック」などのトラブルはなかったのかということだ。

「近時、海外から帰国する子供の教育をめぐって、外国語に堪能で、外国文化を知っているこれらの子は、国際化時代の日本の貴重な人材という議論が盛んである。そのような発想の前提となっているのは、個人を全体社会の統合に貢献する部品とみなすパーソンズ流の構造・昨日主義の立場である。これは、個人よりも社会の側を重視した議論で、あくまで個人の側に視点を置き、個人が文化をいつどのように摂取していくかに主眼を置く本書とは基本的に異なる問題認識の仕方である。」[箕浦 2003:43]

私は日本では帰国子女のための就職支援、進学制度は非常によくオーガナイズされていると考える。「帰国子女」というアイデンティティがここまで優遇され、特別扱いされることも、他国ではあまりないことだろう。しかしこれは箕浦氏康子が述べたように社会の側からの視点である。実際に異なる文化を行き来してきた彼らはどのように感じているのかは分からない。本論文では、社会の側ではなく、個人の側からみた心理的な面に注目す

る。

2. 先行研究

2-1 サードカルチャーキッズとは

帰国子女、グローバルノマッド、サードカルチャーキッズなど、私がこの論文で対象としている、子ども時代に母国以外の国で滞在経験がある人にはいくつかの呼び名があり、多くの定義がある。その中で、私が一番しっくりときたのが

「(サードカルチャーキッドとは) 発達期のかなりの部分を彼らの親文化の外で過ごした人を指す。サードカルチャーキッドはひとつの文化に完全に所属することはなく、すべての文化と繋がりを作る。関わる文化一つずつの要素がサードカルチャーキッドの人生に吸収されていくが、彼らは似たようなバックグラウンドを持つ者に所属意識を感じる。」(Pollock & Van Reken, 2009, p.13)

「親の職業選択によって異なる文化へ親と移動することになった子ども」(p.31)

という Third Culture Kid の定義である。Pollock & Van Reken (2009)では、母国文化を First Culture、移動先のホスト社会の文化を Second Culture と呼び、文化間を移動するということ自体を文化として捉え、それを Third Culture と名付けている。つまり、Pollock & Van Reken (2009)は、日本の文化、アメリカの文化、インドの文化、というように各国の文化の中での人の共通点よりも、文化間の移動を経験した人同士の共通点に注目している。この著書の中では、Cross Cultural Kid という呼び名も登場する。これは

「子ども時代、長い間複数の文化的環境で暮らした、もしくは深く関わった者」(Pollock & Van Reken, 2009, p.31)

と定義されているように、サードカルチャーキッズよりも大きな枠組みとなっていて、サードカルチャーキッズもこの中に含まれている。

二・多文化の子ども、二・多人種の子ども、境界地で育った子ども、国際養子、マイノリティーの子ども、移民の子ども、難民の子どもはクロスカルチャルキッズの対象となっている。(p.31) ではサードカルチャーキッズとは、具体的にどのような人のことなのか。Foreign Service Kids, Corporate Brats, Military Brats, Missionary Kids が代表的な例だとされている。(p.15)

Pollock & Van Reken (2009)は、周りの人と look alike/different、周りの人と think alike/different をベクトルとして、Third Culture Kid と周囲の環境との関係を 4 つのタイプに分けている。まず、見た目と考え方が異なる場合は Foreigner、つまり「外国人」とし

て捉えている。これは分かりやすくて、長期海外滞在者は比較的初期の段階から経験するフェーズでもある。周りの人も、自分自身も、本人がこの社会に belong していないということを認識している状態だ。二つ目は、見た目は周りの人と同じだけど、考え方が異なるという Hidden Immigrant であり、これは本論文の場合、海外在住経験者が母国に帰国した場合に陥る可能性のあるフェーズだ。周囲から求められているものと本人ができることややりたいことが異なり悩むことがある。三つ目は見た目は違うけど、考え方は同じとする、Adopted という状態だ。これは、Third Culture Kid には Hidden Immigrant と同じぐらいよく見られる状態であり、例えば長期海外在住者が長い間ホスト国に暮らすことによって、ホスト文化の価値観や慣習を身につけているフェーズのことだ。最後は Mirror であり、つまり周りと見た目も考え方も同じという状態だ。(Pollock & Van Reken, 2009,p.55)

2-2 カルチャーショック

本論文では、「カルチャーショック」また「逆カルチャーショック」についても触れるが、「カルチャーショック」についてはいくつかの先行研究がある。

小林哲也は、著書において「初めて異文化に接した人は、さまざまの形の心身の変調を経験することが多い。食欲不振や不眠症、焦燥感などはその一例である。それらは、なれない暑さや湿度などに対する生理的反応にすぎない場合もあるが、文化の差異に起因する生体機構の平衡の乱れを示すものであることも少なくない。こうした身体的不調やその原因と考えられる、異文化の中で個人がおぼえる不安、戸惑い、被拒絶感、無力感などの感情的衝撃・認知的不調和を「カルチャーショック」という。」[小林 1983:8]と、説明している。彼は、カルチャーショックを及ぼす原因として言語の問題を大きく取り上げ、人種差別の問題も一つの原因であると指摘している。

箕浦康子は、「その人たちとの社会関係をつくっていく過程で、日本人とは異なる生活様式、行動パターン、人間観、価値観への対応を迫られ、大なり小なりショックを受ける。このような異文化との出会いで人々が受ける感情的衝撃や認知的不一致は、一般に、カルチュア・ショックと呼ばれている。」[箕浦 2003:70]と、定義している。彼女の著書では特に周りの人間と接する際に生じる価値観のズレに注目し、そこからカルチャーショックが生まれると論じている。

星野命は、

「はじめは新しい生活環境に入ったことを嬉しく思い感激ひとしおだが、少し落着いてくると、現地の人びとにとっては何でもないような日常生活のはしばしにおいて、その場に適切な行動が何であるかわからないような常用がふえ、とまどったりフラストレーションがおこる。自分をとりまく環境との間に超え難いもののあることが意識され、被拒絶感やさらに敵意さえ生れる。相手の文化や人びとを攻撃することもおこる。しかし、それと前後して言語習慣になれたり、それが理解できるようになったりするので、それは自文化か

ら異文化へと移行する時期だともいえる。そして徐々に心理的バランスや適応を取り戻す時期に入る。やがて、その異文化の諸特徴を見分けて、新しい生活行動の様式を受け入れ、不安なしに(時折増減するストレスは免れ得ないにしても)、異文化を客観的にとらえることができるようになる。」(星野 1980)[箕浦 2003:41 より引用]

というふうに「カルチャーショック」を説明している。

またリスガードは、

「200 人のフルブライトの身分で渡米したノルウェー人留学生に面接をした結果、6 か月未満、または 18 か月以上では良い適応が見られるが、6 か月以上 18 か月未満では、滞在国の文化に対して不適応症状を示すという、U カーブ説を発表した。リスガードは、カルチュア・ショックの結果おこる不適応症状とは、異文化と最初に接触した直後に生じるのではなく、少し時間が経過してから生じるものであると主張している。この仮説は異文化の接触量が時間経過に伴い増大するにしたがって、不適応症状が直線比例的に増加するものではないことをも意味しているのである。」(Lysgard 1955) [塘 1999:38 より引用]

こちらのリスガードの異文化適応過程を示す U カーブ型のグラフでは、縦の指標はどれだけ適応できたか（指標が高いほど適応できている）、横の指標はその国での滞在期間（滞在期間が長くなると指標が高くなる）を表している。リスガードは最初の一、二か月をハネ―ムーン期間と呼んでいて、それは留学生がまるで観光客のように新しい環境を楽しんでいる状態のことを示している。しかし四～六か月程立つと適応の指標は急降下し、U の谷底に届く。これをカルチャーショック期間と呼んでいて、先ほど述べたようにカルチャーショックは新しい国にやってきた者が滞在してしばらくしてから生じるものであることを表している。一度谷底につくと今度は徐々に適応の指標はあがっていく。新しい国にきて一年ほどたった頃をアジャストメント、つまり適応期間と呼んでいる。一度カルチャーショックを経験すると、次第に留学生は異なる文化に適応しはじめるのだ。二年ほどたつと、適応の指標は最初のハネ―ムーン期間を超え、マスタリー期間に入る。これは、もうすでに新しい文化に問題なくなじんでいることを示している。

2-3 アイデンティティ

「アイデンティティ」という一つの単語についてもいくつかの見解がある。

箕浦は、

「文化的アイデンティティとは、国籍がどこであれ、日本人であるとかアメリカ人であるとかいうことからくる深い感情、ライフ・スタイル、立居振舞い、興味や好みや考え方を

全部ひっくるめたるものをいうが、それはその文化の意味空間と密接な関係にある。ある文化集団に特有なライフ・スタイルを支えている意味空間(文化文法)を自分のものの如くかんじだした時、そこへの帰属感は強まる。文化的アイデンティティが自己概念の貴重な構成要素となるからである。」[箕浦 2003:246]

と定義し、文化的アイデンティティが一度その人の中に出来上がると、他の文化の中に入る際に違和感を感じるようになり、文化的アイデンティティを変えさせようとする圧力を受けると、さらに抵抗感を感じるようになる、と述べた。箕浦はアメリカ合衆国のロスアンゼルスで育つ日本の子どもの姿を多角的に検討し、「いつ頃、どれくらい、その文化の中で暮らしていたかが文化的アイデンティティの形成に大きくかかわってくる。」[箕浦 2003:247]と述べ、具体的には、

「一つの文化圏から他の文化圏への移行が、八歳以前になされた場合は、行った国にすぐ順応し、言葉を覚えるのも速い…九～十歳以上で異文化環境に入った場合は、言葉を覚えるのに時間がかかる反面、自分の母国語や自文化が、異文化で生活するうちに、拭い去られてしまうことも起こりにくい…七歳から十歳までの子は、アメリカ人と日本人の差異を具体的なレベルで認知しているが、十一歳以上になると対人案系の質の違いとして捉える」[箕浦 2003:269]、

また、

「可視的な行動の体系に内在している不可視的な意味の構造を把握しうるだけの、精神的成熟に達し始めるのが九歳頃で、それが全面的に昨日しだすのが十一歳頃であると解釈できよう。この頃から、文化が、パーソナリティの内部に様々な形で組み込まれ始め、所属する文化を自己の一部と感じだす、すなわち、文化的アイデンティティの形成が始まるものとみられる。」[箕浦 2003:271]

と、説明している。

「ハルミ・ベフ(星野 1980 より引用)は、ある人が日本人であるかどうかについては、自己定義によるラベルと他人がつけるラベルがあるという。自分を日本人と思うか思わないかは、さらに他の人が日本人と認めてくれるかくれないか二つに分かれるので、合計四つのカテゴリーができる。自分を日本人と思っているが、日本語を上手に話せないため、他人は彼を日本人と思ってくれない場合や、自分を日本人と思っていないのに、外見から日本人とされる場合などが、外国育ちの日本の子は起こり得よう。」[箕浦 2003:246]

つまり、アイデンティティの見方はいくつかあって、

① 本人は自分を日本人だと思う。周りの人間も彼日本人だと思う。
② 本人は自分を日本人だと思わない。周りの人間は彼を日本人だと思う。
③ 本人は自分を日本人だと思う。周りの人間は彼を日本人だと思わない。
④ 本人は自分を日本人だと思わない。周りの人間も彼は日本人だと思わない。

という四つのパターンがあるという。①と④のケースように、本人と周りの考え方が一致する状況と、②と③のケースように本人と周りの考え方が一致しない状況が生ずることに私は注目した。②と③のケースが起こる際、本人はなにかしらの不快感を感じるだろう。

箕浦は四つの異文化同化の位相があると説明している。
「①自文化と異文化とでは、対人関係の持ち方が違うらしいという認識もない場合。日本でずっと暮らして、日本人のやり方が唯一と信じている人とか、アメリカに来てもいつも日本人と付き合い、アメリカ人の対人関係行動のプロトコルに気付かない場合に多いと予想される。
②異文化社会の人のやり方が、自文化の人とは異なることは知ってはいるが、異文化に入っても、その人たちと同じようには振舞おうとしないか、振舞えない場合。この段階を認知レベルの文化的同化ということにする。異文化の行動パターンで行動することに抵抗が強く、しばしば感情的反発を示す。
③認知・行動面では、異文化社会のパターンを取り込んでいるが、感情の動きは、自文化のパターンに支配されている場合。
④認知・行動・情動すべての面で異文化社会の文化型が取り込まれている場合。」[箕浦 2003:41]

本論文の研究の対象者は母文化から他文化へ渡った際、主に 2 つ目と 3 つ目、場合によっては四つ目の段階を経験している。この四つの段階は確かに存在するが、明確に線引きがされて別れているとは思わない。また、個人が意識して段階を移動するのではなく、無意識、無自覚で次の段階へと進むと考える。

小林は著書で人が他文化へ渡る際、また母文化に戻る際に経験する過程を三つの段階に分けてわかりやすく説明している。

「海外子女の異文化接触の実態および結果(帰国後への影響)を検討する上で有用な道具として文化人類学が提供してくれるものに、「エンカルチュレーション」(enculturation)、「アカルチュレーション」(acculturation)、および「リカルチュレーショ

ン」(reculturation)という三つの相互に関連した概念である。エンカルチュレーション(文化化)とは自分の生まれた社会の文化を習得することであり、アカルチュレーション(文化変容)とは、異文化と接触したために自文化によってすでに身につけた行動体制に変化が起こることをいう。また、リカルチュレーション(厳密に言えば「リエンカルチュレーション」re-enculturation が正しいかもしれない)とは、自文化への復帰に際して生ずる個人の行動体制の調整過程に対して当てた筆者の造語である。自文化への復帰過程はたんなるエンカルチュレーションでなければ、さりとてアカルチュレーションとも違う。」[小林 1983;3]

「リエンカルチュレーション」とは、母文化に戻った本人が「逆カルチャーショック」を受けた後、どのように調整していくかのことであり、本論文で一番注目したい過程である。
また、小林は成人と子どもの異文化体験を区別して考え、

「おとなは外国暮らしを”仮住まい”意識で受けとめるため、異文化への深入りを避けようとする傾向があるが、子どもには”本住まい” “仮住まい”といった区別意識はなく、彼らにとってはどこに住もうとそこが”本住まい”になるということである。」[小林 1983:26]「成人と子どもの異文化体験の相違は、本質的には、この仮住まい意識の有無にある、といわれている。」[小林 1983:38]

と説明した。

３．日本の帰国子女

グローバル化が進み、多くの日本人の国家や文化を超える移動が当たり前になりつつある。また、彼らと共に多くの子どもたちも移動している。現在 78312 名の小中学生が海外で暮らしていて、毎年約 1 万名の生徒が長期滞在した後帰国している。（平成 27 年度海外在留邦人子女数統計（長期滞在者））

ここで気を付けなければならないのが、同じ異文化体験でも、滞在地域、滞在年数、海外での就学形態、帰国後の就学形態、またその子どもの性格や年齢などによって内容が異なるので、「帰国子女」とひとくくりにしてはいけないことだ。(江淵 p481)また、多種多様な帰国子女がいるように、帰国子女が抱える悩みは様々である。しかし、多くの帰国子女が共通して抱えている問題もいくつかある。

3-1　逆カルチャーショック

帰国子女が日本に帰国した際に、カルチャーショックを感じることがあり、それを逆カルチャーショックやリターンカルチャーショックと呼ぶ。母国や母文化に帰ることは一見難しいものではないようにみえるかもしれない。しかし、人格形成の途中に一度異なる

文化と言語の中で生活した子どもたちにとっては、母文化に帰ることはとてもストレスフルな経験になることもある。特に、見た目が日本人であることから日本社会の「常識」が分かるだろうと周りから判断され、本人と周りとのギャップで戸惑いを感じることがある。文化ひとつひとつにその文化特有のルールがあり、一度そのルールを身に付けた個人が異なる文化へ移動した時、身に付けているルールと新しい文化が個人の中でぶつかり合い、大きな負担になることがある。(斎藤 179)1987 年に放送された NHK のドラマ『絆』では、アメリカから帰国した生徒が「へんじゃぱ」と呼ばれ、精神的にも身体的にいじめを受ける様子が描かれていた。このようなひどいいじめを受けていないとしても、帰国子女は自らの中で「内面的環境との闘い」が行われているのだ。(江淵 478)

箕浦は復帰ショックについて調べるため、長期滞米の場合、十～十四歳の間に帰国した場合、幼・児童期をアメリカで過ごし十歳未満で帰国した場合、中学・高校時代をアメリカで過ごした場合、とアメリカ滞在経験のある学生を 4 つのグループに分け、面接した。年齢や滞在期間、滞米中の環境、英語力が復帰ショックの内容に関係してくると分かった。(箕浦 253)

3-2　学習面での適応

帰国した子どもたちが、日本の学校に入ると、学習面での適応に困難を感じる場合がある。海外の学校で勉強していた内容とずれていたり、進度が遅かったり、そもそもある国では学ばない分野であったりすることが原因となっている。小林が行った調査では、長期滞在を終え帰国した生徒が一番に困っている教科は国語、次いで社会、算数（数学)、体育であった。(208)国語では、漢字が読めないこと、語彙不足、作文能力や読解力が劣ることが問題になっていて、特に小学校 1～2 年の基礎学習時に日本語を勉強しないことが影響していると考えられている。社会は、日本で「常識」とされているような日本の地理や歴史を学習いていないため困る生徒が多い。算数（数学）は、日本語の語彙不足から、文章題が理解しきれていないことも一つの問題ではあるが、国によっては全体的に算数のレベルが低く進度も遅いため、帰国した生徒が日本のレベルとスピードに追いついていない問題もある。体育は、日本にある鉄棒のような種目がなかったり、国によってスポーツは社会教育とみなされ、学校教育に含まれていなかったりするところもある。そのため、日本の体育の授業で劣等感を持つ生徒が出てくる。(210)中西と野田が調査を行った帰国子女受け入れ校、研究協力校のうち小学校は 78 パーセント、中学校は 73 パーセント、高校は 69 パーセントが帰国した生徒を対象に特別な指導を行っている。特別な指導の科目は国語、社会、算数（数学）の順に多い。このような特別な指導や取り出し授業などは一つの解決策となるかもしれない。

3-3 環境

子どもが帰国した際に困難に出会うのは、海外に長期滞在して日本の文化から離れてしまった彼らのみが原因ではない、と考えることもできる。小林が行った日本の青少年全体を対象とした調査から、非帰国子女も帰国子女と同じ様な不安を生活の中で抱えていることが分かった。そこから、帰国子女だけを切り離して考えるのではなくて、日本社会と教育制度全般を考え直す必要があると主張している。（小林 172）また、江淵は日本の「“異分子”を受入れようとしない…閉鎖的性格」が帰国子女が日本社会に適応する際に起こる問題の要因であると述べている。（江淵 481）もはやこれは受け入れ側の日本社会の問題であると言える。ハルミ・ベフ教授は、「帰国子女はアメリカではあまり問題にならない。日本で問題になるのは海外子女が帰国してくる（日本の）環境が問題だからではないか」と発表している。「日本人の文化的孤立主義」と呼び、日本人が日本文化の中に異文化のあることを認めないことを批判した。（星野 241）

５．5 人の帰国子女

4-1 インタビュー

帰国後具体的にどのような問題を抱えることがあるのか聞くために、5 人の帰国子女に集まっていただいた。この 5 人は一度アメリカに暮らしたことのある、現在大学生、という共通点を持ちながらも、滞在年数、就学形態、入国・帰国年齢はばらばらである。カフェでひとりずつの経験を聞きながら、自由に話していただいた。

ケース番号　1
E（海外滞在 18 年間）
性別　女性
アメリカ入国年齢一歳
日本への帰国年齢十九歳
アメリカ就学形態　現地校、補習校
日本就学形態　私立大学国際教養学部

E「私は物心がついた頃にはすでに母国から離れていた。アメリカで暮らしている間、（週に一度の）補習校と家の中以外日本語を使うことはなかった。でも私は『日本人でいたい』という思いが強くあったし、日本のドラマやアニメが好きだった。メディアを通してだけではなく日本で暮らしたいと思って、日本の大学に進むことを決めた。」

―でも E は人生のほとんどをアメリカで過ごしきたわけだし、最初は大変だったでしょう。

E「段々と慣れていったけど、確かに戸惑いを感じることも多かった。所属している軽音サークルには海外経験ある人が 1 割ぐらいしかいなくて、最初なじむことが大変だった。特

に、そこでの先輩との距離の取り方で困った。私は先輩と仲良くなりたかったから、積極的に話しかけて遊びに誘ったりしていた。最低限の敬語を使えてればいいと思っていた。でも、（サークルの）同期からはぐいぐいいきすぎじゃない、という指摘を受けてショックだった。」

（話したあと）
E「もっと周りからの理解が必要だと思う。自分みたいに見た目は日本人だけど、人生のほとんどを海外で過ごしたひともいるから。外から見たら私は日本人だけど私は自分のことはジャパニーズアメリカンだと思う。」

ケース番号　2
M（海外滞在 11 年間）
性別　女性
香港入国年齢 2 歳
アメリカ入国年齢 11 歳
日本帰国年齢 13 歳
香港就学形態　インターナショナルスクール、補習校
アメリカ就学形態　現地校、補習校
日本就学形態　公立中学校、私立高校、私立大学文学部心理学科

M「電車の乗り方とか服装の違いで気になることは多かったが、周りに『変わっているね！』と言われることはなかった。でも今思えば、言いたいことを言いすぎて友達と喧嘩してしまうことが多かったのは、日本でのコミュニケーションの取り方をまだわかっていなかったかもしれない。」

―学習面で苦労したことはあったか

M「勉強は大変だった。香港とアメリカにいる間に（週に一度）補習校に通っていたけど、日本に帰国して進度がずれていて、教え方も違うことに気付いた。特に数学では日本の学校のレベルに追い付くことが大変だった。あと、日本で習う『社会』に関しては勉強したことがほとんどなかったから一から勉強しなければならなかった。日本地図すら分からなかった。理科も、内容は理解できたけど、用語を日本語でもう一度覚える必要があって、苦労した。日本に帰って編入した学校には、帰国子女が少なくて、学校側もあまり手伝ってくれなかった。もう少し補修授業とか、簡単な個別指導があったら嬉しかった。」

ケーススタディー　3
H（海外滞在 9 年間）
性別　男性
アメリカ入国年齢 5 歳
日本帰国年齢 14 歳
アメリカ就学形態　現地校、補習校
日本就学形態　公立中学校、私立高校、私立大学理工学部

H「俺はニューヨークの中でも日本人が多く住む地域に住んでいて、向こうでの Junior High School を卒業して、日本の中学校に 3 年生の夏から編入した。編入先の中学校では、とにかく周りにはやくなじみたかった。馴れ馴れしい、調子に乗っている、と思われないように、名前に「さん」とか「君」付けをして距離感を保つように意識した。帰国子女だからといって特別扱いされなかったし、変わっている、と思われたくなかった。あと、英語の授業では英語ができるからとでしゃばらないようにしていた。」

―人間関係で意識していたことが多かったのか

H「そうだね。高校の部活で、同期、先輩、後輩、それぞれへの接し方を考えさせられた。特に同期と接するうえでの、『対等な振る舞い』が難しかった。『ただのいいやつ』から『友達』になるのに苦労した。性格的な要素もあるかもしれないけど、部活での在り方以外にも、同期の話題についていくための音楽、ドラマ、有名人の『共通の認識』を培うのが大変だった。こうやって色々意識していたから、『帰国子女って感じしないね』と言われることが多かった。」

―学習面ではどうだったか

H「勉強ではあまり苦労しなかったかもしれない。アメリカに住んでいる時と、帰国後も塾に通い、本格的に高校受験に備えていたから。ただ、体育の時に自分だけが初めてやる種目、たとえば柔道の時に、授業の進行を妨げる、とか、迷惑にならないように、という緊張感がつきまとっていた。」

H「学校に編入した時、誰か一人生徒がついてくれたら助かった。最初「暗黙の了解」や「空気を読む」という概念自体理解できなくて大変だった。そういうことは先生に教わるのではなく、同年代から知りたい。異なる文化の中で育ってきたことから、適応する能力はあるけど、その文化のルールを知らないと厳しい。」

（話したあと）
H「関係ないかもしれないけど、ファッション、髪形とかも気にした。日本人は自分の評判や、どんな人と付き合うか、を気にする性格が強いからか、共通の価値観を重視するからか、「おしゃれ」「ダサい」の線引きが厳しいと感じたから注意した。」

ケーススタディー　4
R（海外滞在 7 年間）
性別　男性
アメリカ入国年齢 5 歳
日本帰国年齢 12 歳
アメリカ就学形態　現地校、補習校
日本就学形態　私立中高一貫校、私立大学法学部政治学科

R「俺は中学校 1 年から帰国子女が多く通う中高一貫校に入学した。特に中学校の 3 年間は帰国子女だけのクラスに所属していたから、学習面で苦労することはあまりなかった。授業を帰国子女向けに分かりやすく進めてくれたのがよかった。ただアメリカのように毎日が自由研究みたいな授業とは違い、単純作業をこなしていく授業は魅力的ではなく、退屈であると感じた。」

―周りになじむのはそこまで大変ではなかったのか

R「部活動の上下関係は難しかった。家族から日本の上下関係の厳しさについて言われていたけど、思っていた以上だった。アメリカでは年齢差ひとつくらいでは友達感覚の関係性を持っていたけど、日本では全く違った。一つ上の先輩でも絶対的な存在であって、何でも従わなければならない。アメリカでは実力主義なところがあり、後輩でもバンバン試合に出ることができたけど、日本では練習でボールにも触らせてもらえなくて、最初は不満が大きかった。」

（話したあと）
R「逆に、『帰国子女』になることで精いっぱいだった。周りから帰国子女だから英語ぺらぺらなんでしょ、とか、ノリがいいでしょ、とか勝手にレッテルを張られることがあって、自分はそうでもないけど、逆に帰国子女の中で目立ちたくなかったから、『帰国子女』のイメージになるようにしていて少し窮屈だった。でも、やっぱり帰国子女が多い学校でよかった。同じ境遇の人が近くにいることで、勉強や生活で自分が『劣っている』と感じることは少なかった。」

ケーススタディー　5
L（海外滞在 2 年）
性別　女性
アメリカ入国年齢 11 歳
日本帰国年齢 13 歳
アメリカ就学形態　現地校、補習校
日本就学形態　公立中学校、県立高校、私立大学国際教養学部

L「私は中学校 1 年の途中に帰国して、アメリカ行く前に暮らしていた同じ町に帰国した。編入した中学校には既に友達が何人かいた。帰国子女は周りにいなくて、特別な取り出し授業などは特になかった。」

L「補習校で他の海外子女を見て、自分は 11 歳まで日本にいたし、そんな苦労しないだろう、と楽観視しすぎていた。帰国する準備を全く行わなかった。いざ帰国して中学校に入ると、敬語が全然使えなくて、上下関係が難しかった。

―小学校では上下関係なかったのか

L「小学校ではなかった。一個上の友達もいたぐらいだった。中学校で敬語を使わなきゃいけないっていうのも知らなかったし、それを分かっても敬語があんまり使えなかった。
先輩以外でも、友達とのコミュニケーションも難しかった。例えば中学校の女子でよくあった「トイレ一緒にいこう」とかが理解できなかった。でも嫌われたくなかったから、気にしないふりをしていた。女の子のグループで段々慣れていった。」

―勉強面では

L「勉強では、社会が大変だった。自分が習っていない地理や歴史を学習している前提でどんどん進むから、授業の前に予習する必要があった。」

4-2 ケーススタディーの考察

インタビューした 5 人が海外滞在期間、海外へ渡航した年齢、日本に帰国した年齢、就学形態、性別は様々ではあるが、それぞれが日本に帰国して社会面と学習面で問題を抱えていたことが分かる。様々な問題が浮かび上がってくる。

全員が帰国して人間関係の問題で悩んだ経験があることが分かる。主に部活・サークルでの上下関係に戸惑いを感じたことや、敬語に慣れなかったことだ。厳しい上下関係が

存在しない文化で成長期を過ごすと、日本の「先輩」「後輩」といった関係を理解しづらいようだ。また、H は同世代の流行りについていけなくて困ったことや、「空気を読む」という概念が難しかったこと、など同年齢の人間関係でも悩んだことが分かる。L も、女子グループの中の行動や暗黙のルールを最初は理解できなかったことをあげている。同年代同士のコミュニケーションの中には、その文化特有のルールがある。日本では多く存在する、周りの人の表情や反応を意識し、協調性を生み出すコミュニケーション方法は、自分の主張を強く出す方がいいとされる文化で育った人からするととても難しいものである。

R の通っていた中学校と高校では帰国子女に「目立ちたがり」「日本語より英語の方が得意」「自己主張が強い」といったレッテルを張られた。R 自身はそのようなことが当てはまらなかったため、違和感を覚えた。しかし、目立ちたくなかったのでそのイメージ通りにしようとした。日本には様々な国や文化からの帰国子女がいて、さらにひとりひとり異なる性格を持っているため、一概に「帰国子女は○○な人」とは決めつけることができない。しかし、実際ではこのような先入観を持たれていることが多く、自身とのギャップに困惑している帰国子女がいる。

日本の学校でクラス分けされ、帰国子女向けの授業を受けた R、また帰国する前からアメリカで高校受験の準備として塾に通っていた H は学習面ではあまり困らなかったことが分かる。現在、ena を代表とする、海外で日本へ帰国する準備ができる塾が多数存在する。このような塾は外国の大きい都市に集中しているが、何処でも受けることができる通信教育事業も益々広がっている。このような教育の手段を活用することで、帰国後に学習面での問題を減らすことができるだろう。

一方で、M と L は小学校で基礎的なことを習うことを前提としている社会や国語で苦労した様子だ。補習校の進度が遅い、そして現地校での教え方と異なることが問題のようだ。M と L が通っていた補習校は週に 1 度のペースで通う日本人学校であり、どうしても日本の学習進度と差ができてしまう。また、科目によっては外国と日本で習い方が異なるものがあり、帰国した学生は混乱してしまう。科目の中身が全く異なる場合もある。例えば、H は日本の体育の授業で初めて行う種目があり、緊張していたと話している。

海外滞在期間に注目する。今回インタビューした 5 人のうち、海外滞在期間が最長であったのは 18 年間の E で、最短が 2 年間の L だった。16 年も異なるものの、ふたりとも先輩との距離の取り方が難しかったことや敬語の使い方が分からなったこと、また友人とのコミュニケーションの取り方など、人間関係での困難があったことがみえる。よって、必ずしも海外滞在期間が短かった人は逆カルチャーショックが少なく、すぐ周りになじめる、と決めつけることはできない。

就学形態はかなり異なる。M と H は一度公立の中学校に編入したのち、私立の高

校に入学している。R は帰国子女が多く通う中高一貫校に入学していて、その中でも 3 年間は帰国子女のみのクラスにいた。L は海外に行く前に通っていた小学校の生徒がそのまま多く通う公立の中学校に編入し、その後県立の高校に進学している。E は帰国子女や留学生が多く所属している私立大学の国際教養学部に入学した。帰国子女が多く通う学校に入学した R は、帰国子女用の授業を受けたため、周りより劣っていると感じたこともあまりなく、学習面であまり困ることがなかった。逆に、海外の補習校でしか日本の授業を受けることがなかった M は、日本の中学校と高校の勉強内容の進度の速さに驚き、追いつくことが大変だったと言う。

５．おわりに

渡航先での帰国子女教育問題は注目されてきたが、帰国してからの問題はあまり注目されていないように感じた。そこで、私は本論文を通して帰国子女が日本に戻った後も困難に直面することがあることを明らかにしたかった。「日本人らしく」いることを当たり前とされ、いられなかった場合は非常識と言われることもあれば、「帰国子女」というレッテルを張られ、勝手にパーソナリティまで決められてしまうこともある。実際に異文化で成長期を過ごした大学生 5 人にインタビューし、滞在年数や就学形態によって程度や内容は変わるものの、日本に帰国して抱えていた問題を知ることができた。今後ますますグローバル化が進み、文化間を移動する子どもが増えるだろう。そんな子どもたちが母国に戻った際、受け入れるための理解が必要となる。

６．謝辞

この研究を卒業論文として形にすることが出来たのは、担当して頂いた塩原良和准教授の熱心なご指導や、E, M, H, R, L の 5 人が貴重な時間を割いてインタビュー調査に協力していただいたおかげです。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

参考文献リスト

書籍

浅井亜紀子
(2006)『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』ミネルヴァ書房.
江淵一公
(2002)『バイカルチュラリズムの研究 ： 異文化適応の比較民族誌』九州大学出版会
川上郁雄
(2013)『「移動する子ども」という記憶と力 ： ことばとアイデンティティ』(リテラシーズ叢2)くろしお出版

栗原祐司, 森真佐子
(2006)『海外で育つ子どもの心理と教育 ： 異文化適応と発達の支援』金子書房
小林哲也
(1983)『異文化に育つ子どもたち』有斐閣選書
斎藤耕二
(1996)『異文化体験の心理学』川島書店
桜井厚
(2012)『ライフストーリー論』弘文堂
佐藤郁哉
(2006)『フィールドワーク(増訂版)』新曜社
東京学芸大学海外子女教育センター編
(1990)『帰国子女の心理臨床的研究』東京学芸大学海外子女教育センター
塘利枝子
(1999)『子どもの異文化受容』ナカニシヤ出版
中西晃・野田一郎
(1980)『帰国子女に関する調査研究』東京学芸大学海外子女教育センター
星野命
(1980)『カルチャーショック』(現代のエスプリ一六一号) 至文堂
(2010)『異文化間教育・異文化間心理学』北樹出版
箕浦康子
(1990)『文化のなかの子ども』(シリーズ人間の発達 6)　東京大学出版会
(2003.2)『子供の異文化体験 ： 人格形成過程の心理人類学的研究』(増補改訂版) 新思索社
Eidse, F., & Sichel, N.
(2004). Unrooted Childhoods：Memoirs of Growing Up Global 1st Ed.. Yarmouth, Me.: Intercultural Press；London：Nicholas Brealey.
Pollock, D.C., & Van Reken, R.E.
(2009). Third Culture Kids: Growing Up Among Worlds. Rev. Ed. Boston: Nicholas Brealey Publishing.

論文

嘉納もも
(2004)「成長期の異文化接触--Third Culture Kids 研究と海外・帰国子女研究の比較」,『現代社会研究』2004-01;6:67-78.
Kano Podolsky Momo
(2008) “Internationally Mobile Children: The Japanese Kikoku-shijo Experience Reconsidered”,『現代社会研究科論集』2008-03;(2):49-69.

黒羽カテリーナ
(2013)「帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか -2 つの事例を対話的自己論の視点から検討する」,『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2013-09-30;7(1):15-24.
小島 奈々恵 , 深田 博己
(2011)「帰国子女の母国適応とホスト国適応 ： 適応プロセスを追って」,『留学生教育』2011-12;0(16):89-98.
鹿野 緑
(2012) 「海外・帰国子女研究の文献分析 ： 研究方法論の志向を探って」,『南山大学国際教育センター紀要』2012;13:1-16.
箕浦康子
(1994)「異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ (国際化時代の教育--グロ-バル・エデュケ-ション<特集>)」,『教育学研究』1994-09;61(3):p213-221.
(1994)「異文化体験の心理学 (<特集 2>「外的枠組に照らした個人行動の統制」)」,『立命館教育科学研究』1994-03;4:63-68.
(1991)「小講演 17 文化とパーソナリティの関係をどう考えるか ： 未成年期の異文化体験研究からの試論」,『日本教育心理学会総会発表論文集』1991-08-01;(33):L33-L34.
(1988)「日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程 ： 帰国者への象徴的相互作用論アプローチ(<特集>海外帰国子女の心理学的課題)」,『社会心理学研究』1988-11-25;3(2):3-11.
Lysgard, S.
(1955) Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. International Social Sciences Bulletin. 7, 45-51

NHK ドラマスペシャル『絆』1987 (原作：大沢周子『たったひとつの青い空―海外帰国子女は現代の棄て児か』)

平成 27 年度海外在留邦人子女数統計（長期滞在者）
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin_sj/